

犬係りの菊池隊員(左)と北村隊員(右)

### 準備期間中のこと

隊員候補者として私が犬ぞりに関係を持ち出したのと相前後して 北海道大学を中心とする「極地研究グループ」が 西堀氏の熱意に動かされて 北海道に分布する樺太犬の調査から その中の1部を稚内に集め 犬ぞりチームとしての訓練を始める仕事を引受けたのである。

「極地研究グループ」のやった仕事は そればかりではなく 日本には今まで ほとんど行われていなかった犬ぞりに関する各種の研究を初め そり並びに 種々の器具 あるいは犬の食糧などの試作・試験を行い 観測隊出発までに その準備の万端を整えてくれたのである。

札幌市在住の極地研究者 加納 一郎氏  
北海道大学教授 犬飼哲夫博士  
北海道大学講師 芳賀 良一氏

その他 北海道大学山岳部の学生諸君達が やり上げてくれたことは 今回の南極越冬に際して どんなに役に立ったか はかり知れぬものがあった。

そもそも 日本には昔から 犬ぞりの専門家はいなかったのである。古く樺太や北海道で 実用に供された少数例はあるが それらの記録が残っているわけでもな

ければ 技術を伝える参考書も 機関もないわけである 動物学の先生方 極地の研究者 獣医学の先生達 馬車の製造業者 食品会社などの人達がより合って いろいろ研究しあったのが 私たちの犬ぞりであって いわば歴史もなければ伝承もない。本当にこれらの人たちの理解と熱意と努力が造り上げたものであった。

### 「犬ぞりは役に立たない」と言われたころ

小さくて スペースに余裕がなく その上 ローリングのはげしい南極観測船「宗谷」。その宗谷に乗って22頭の樺太犬を 赤道を越えて南極まで無事輸送する仕事は 並大抵のことではなかった。犬係は北村・小林と私の3隊員であったが 船長 隊長等をはじめ観測隊関係者全員の努力と愛情によって 犬達を無事極地の氷の上に降すことができたのである。

この努力 このわずらわしさ これらをやりとげた際には「極地へ行ったら 必ずすばらしい働きを見せてくれるに違いない」と皆の心の底にひそかに大きな期待があったのであろう。

昭和32年1月 南極はリュツォウホルム湾の海氷上に降り立った樺太犬たち サア 皆の大きい期待通り 働いてくれたであろうか。

この頃から そろそろ「犬ぞりは 手まばかりかかって 余り役に立たぬ……」との声が出かかったのである。その頃の様子を 私なりに分析してみると

- ① 犬係である私たち自身 今まで 本当に犬ぞりを利用した経験もないズブの素人であったこと
- ② 隊長以下1人として 犬ぞりの真の実力を知っている人もなく 犬ぞりというものが はたして どんな時に本当の力を発揮し どんな時に使用できないのかという 最低の常識すらなかった。



接 岸 ('57. 2. 3)



去 り ゆ く 宗 谷 ('57. 2. 15)

- ③ 雪面の状態は1年を通じて 最悪であり ザラメ雪と パドルに物すごくなやまされた。
- ④ 犬たちは長い航海にくたびれ あしのうらはフヤケていて ザラメ雪の上を走ると 傷をした。さらに 稚内における春の訓練以来チームとしての練習をしていないので チームワークの点にも 難点が多かった。

このような条件で 私たちは オングル島偵察に出かけた。荷は重く メンバーは多く 雪面は悪く 犬はチームワークに乏しかった。しかし何とかしてオングル島に偵察上陸し 基地偵察の任務の一端を果たしたわけである。雪上車なら1回に3トンも4トンも運ぶ荷物も犬ぞりはせいぜい300kg程度にすぎない。

こんなことが たびたび重なって「犬ぞりは役立たぬ」といわれたのであるが それはいわれるほうも いうほうも当然であったろう。

### 冬ごもり前の訓練

昭和32年2月15日正午 宗谷はしずかに氷を離れていった。氷上に残った私たち11名には 運び残された物資の輸送・基地建設の仕上げ その他の仕事が山程あった。

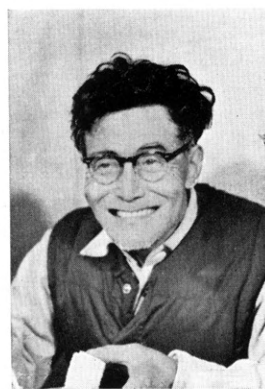
来るべき冬にそなえて 基地の完全化に全力がそそがれ 3月と4月が目まぐるしく過ぎていった。その間にただ1回 4月にオングル島の対岸の大陸へ 雪上車をかけて上陸する機会を得たが 5日間のこの小旅行に「シロ」と「ジロー」の2頭の若い犬をつれて行って どんどん走らせる訓練をした。

基地建設はまだ充分終わったわけではなく 猫の手も借りたい位 忙しいときであったが 5月の1ヵ月間は犬ぞりの訓練期間に当てられた。

西堀越冬隊長の命によって 北村隊員と私は極力犬ぞ

りの訓練に専念し 他の隊員もこれに協力をおしなかった。

犬の訓練 一口にこういっても いろいろなことがある。なかでも最も大切なこととして 次の2つがあげられる。それは先導犬の教育とブライ(停止)の訓練である。



西堀栄三郎越冬隊長

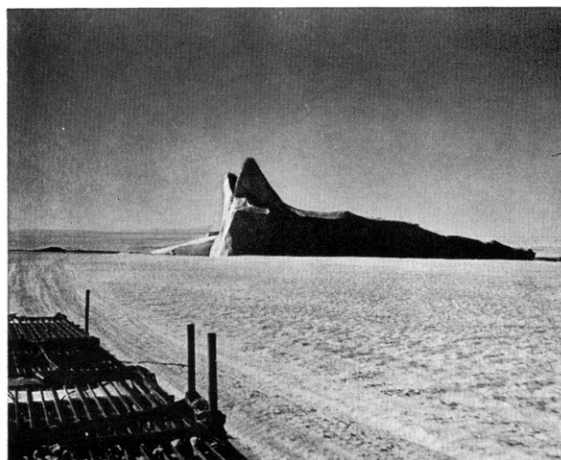
① 先導犬の教育 日本から連れて行った優秀な先導犬「リキ」や「テツ」は南極では すぐ完全な先導犬として使用できないのである。

それは日本で行動していた場合はすべて 道のある所か 森林の中(これも大抵通る道は決っている)であつて 南極の大雪原のように 目標物の何もない所を 何キロも何キロも 真直ぐに走るということはなかつたのである。

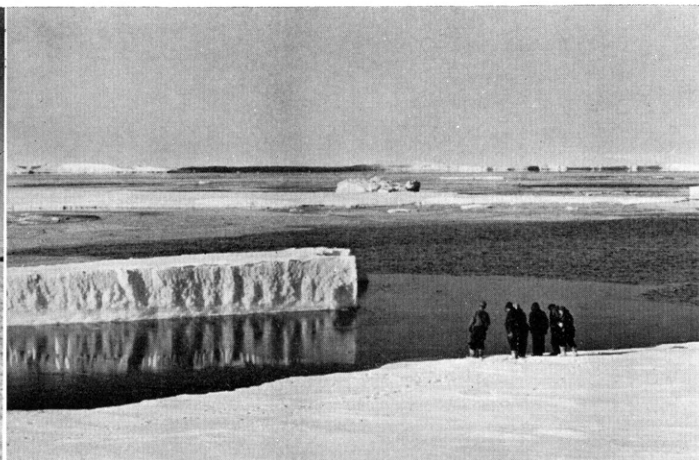
ところが南極では この真直ぐに走るということが 最も重要であつて 私たちが後方から「トオー トオー」と呼んでいるかぎり 先導犬は命ぜられた方向へ 一直線に走つて行つてくれなければならない。

老先導犬の「リキ」や「テツ」に 今さら再教育をするよりも 若くて頭のいい「シロ」を選んで この「トオーの訓練」すなわち 真直ぐに走る練習を行つた。

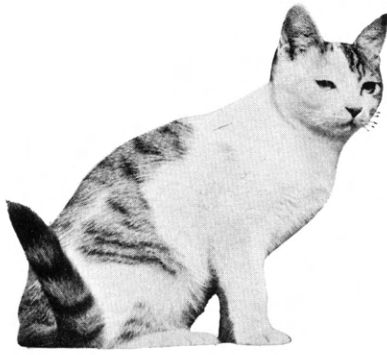
②「ブライ」という号令は 「止れ」を意味するが これは走っているものが ただ止つただけではいけないのであつて 止つて 座つた以上次に「トオー」(前進)の号令がかかるまでは 絶対にその場を動いてはいけないのである。これは 簡単なようで なかなかむずかしい 非常



ジェラシー氷山と呼んだ美しい氷山(57.3.2)



オープンシーとなったオングル海峡(57.3.27)



越冬した猫の「たけし」

に根気のいる訓練である。

以上 2種類の訓練を中心にしてほかに「カイ」(右へ)「チョイ」(左へ)の号令を教えたりチームとしての訓練を行ったりした。その結果 何とか南極の春

(8~9月)からの旅行に耐え得る確信を得たのである。

### ペンギンさがしのころ

5月30日に最後の太陽と別れてから 7月14日再び太陽を見るまでの いわゆる冬ごもり中は そりの改造や各種器具の整備を行った。

8月初めいよいよ行動を開始した。まず最初は気象もよくないし 足ならしもできていないから 基地の近くから行動を行い だんだんに足を延ばして行くことにした。ちょうどよいことに 越冬前の宗谷停泊中 オングル島南西方のある島に 相当大きい ペンギン・ルッカー (群棲地)があることを飛行機上から発見しているのでこの島を犬ぞりで 確かめようということになった。

8月2日 オングル島を一周して 付近の島々を眺めながら計画をねり ルンバ島 シガーレン島 ユートレ島 長頭山と次第に足をのばしていった。

しかしながらペンギンはどこにもいない 影も形もない。これは後でわかったことであるが その時期にはペンギンは まだずっと北方の氷の割れている海の彼方において 10月中旬に この付近までやってくるのであった。

次にユートレ島へ行った時の様子を紹介しよう。それは 越冬中に各方面へ出かけた犬ぞり旅行中で 最もひどいブリザードに遭遇したときのことである。

8月12日 午前9時 中野・佐伯両名からなるペンギン生態調査班(とはいえ本当はまだペンギンはいなかったのだが)を ユートレ島まで送りとどける任務をおびた犬ぞり班(菊池・北村および犬15頭)は勇躍昭和基地を出発した。春になって 初めての外泊(テントを持って)旅行である。

朝のうちは余りよいお天気ではなかったが 気圧の降下もそれほど著しくはないので たいして気にしなかった。南下するにしたがい だんだん視界が悪くなり正午に シガーレン島の西側を通過した頃は 相当あやしい天候になっていた。午後コンパスをたよりに ユートレ島へ向って進み 14時30分頃 4人は 島の南側の入江らしい所に入りこんだ。下はガリガリの海氷でその上に5cm程やわらかい雪が積っている。ガスは濃く 視界は2~300m 但し無風 チラチラと粉雪が降っている。

「もう少し入り込んで 雪の多い所で キャンプにしよう」 こういいながら中野・北村両隊員はキャンプ地を捜しに先行した。しばらくして帰ってきた北村隊員は「先によいキャンプ地がある」とのことだ。地図(ノルウェー発行 25万分の1)を眺めて相談しているその時 まさに その時 ビュー!! という音がして それと同時に 何となく身体が圧せられるような気がした。

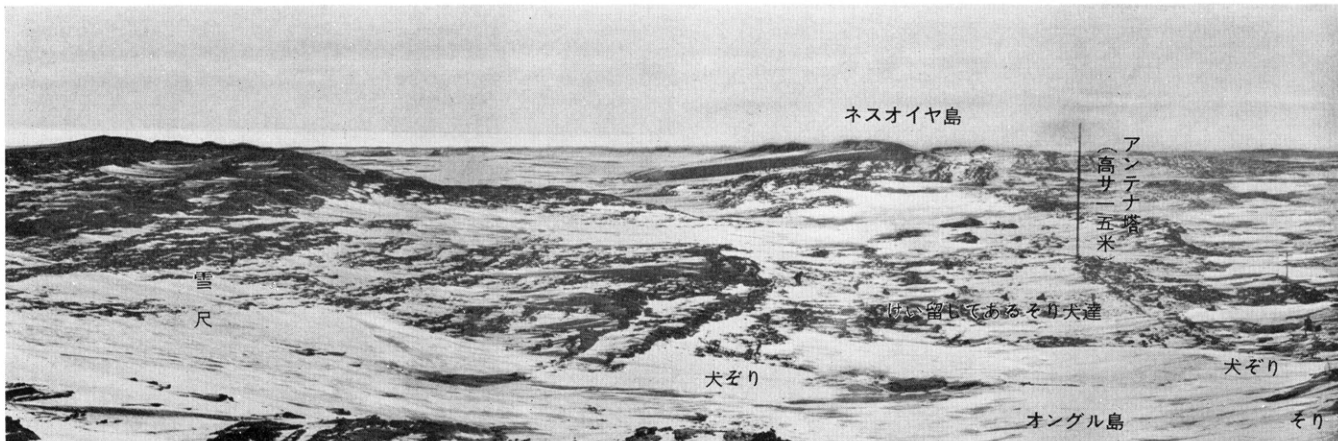
地図を見ていた眼をあげて見る。

「アッ!! ブリザードだ!!」

ユートレ島の上から 暗黒の雲のような ブリザードが 地上をかすめてやってくる。

「来た!!」

と思った瞬間 既に私たちは 吹きまくるブリザードの中に まき込まれていた。



昭和基地全景

その上に座布団がわりに乗せてあった キャンプ用のマットが1枚 風下へフットんでいった。北村君がぬいでおいたオーバー手袋も同じ運命だ。中野リーダーは足跡をたよりにやっと 犬たちのところにたどりつく。そして『これじゃ テントも張れないだろう 先に行こう』こういって犬たちをゆう導する。そのの後部にいる私からは 犬たちもはっきり見えない。

100mも進んだらうか? もう方角さえ見当がつかぬ。

「この辺で テントを張ろう!!」 こういってそれを止める。「物をとばすなよ」 バタバタ風にあおられる極地型テントを張りだしたが 下は水だ チャチなペグ(テント用 30cm程度のジュラルミン製クイ)では用をなさずアイスピトン(鉄製クイ)で止める。

苦闘1時間の後 4人はやっとテントの中に入り込んでホット一息。犬たちはすでに氷上にうづくまっで新雪を頭からふかぶかとかぶり あったかそうだ。

### パッダ島並びに大陸上陸地点の偵察行

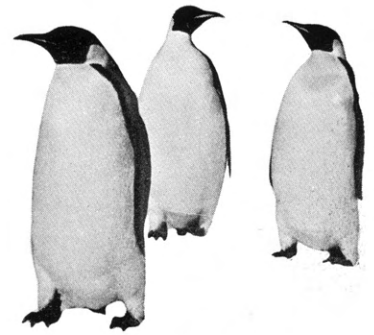
8月の末から9月にかけて 犬ぞり旅行も いよいよ本格的になってくる。それは1年中で最も寒いシーズンである。-30°C~-36°C こんな温度が10日間も続いた。その中で犬ぞり旅行 これはなかなか面白い。「こんな中を 長い間旅行していると 着ているものが次第にバリバリに凍ってきて 遂にはヨロイのようになってしまう……」と外国誌に出ていた。外人はどうも表現が大げさすぎると思っていた。ところが今度の旅行のとき 私たちの衣服も少しバリバリしてきたのである。

それは 身体から自然に発散する水蒸気や テントの中であたためられて溶けた水分などが凍りついて 衣服は何となくバリバリしてくるのだった。

寝袋に入っるととき 寒いからつい顔までかぶってしまう。こうしたが最後寝袋の口は はく息が凍りつ

いて一晩の内にバリバリになり トタン板のようになってしまう。

第一 -30°C以下が四六時中つづきかつ常に強い風がビュービュー吹きまくり 身をかくす何物もない広大な氷原上の旅行をつづけると 毎日の生理的排せつも意にならぬ。



帝王ペンギン

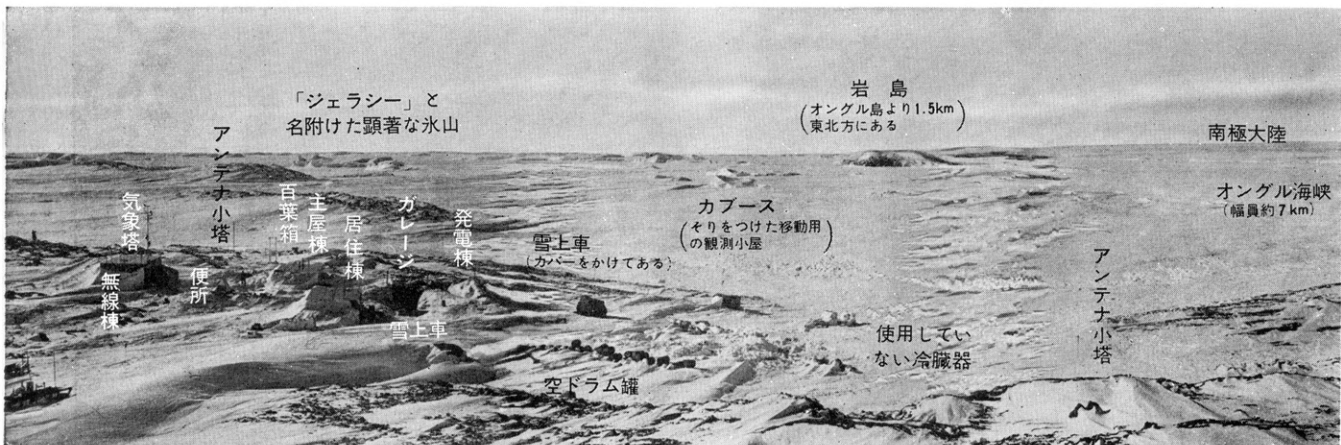
でも こんなことなどはどれも私たちの苦にはならないのだ。慣れとがまん強さが すべてを解決してくれるし 最後には そのような条件のなかにいることに喜びさえ感じてくる。

その上 もっと私たちに喜ばしてくれるものは 自然現象の面白さだ。大陸から降りてくる広大な大陸氷の動きは この真冬にも絶えず行われており ビンと張りつめられた海の氷が この自然の大きな力によって 押しつけられ壮観な割れ目(クラック)を生じている。

氷山の各種の形 大きさそして その古さかげんを眺めていると全く楽しい。また露岩の出ている所で 日本から持ってきたハンマーを振って 岩石を採取するうれしさは 今までかって日本のいかなる調査地でも味わったことのない喜びである。

かくして 私たちはパッダ島に初上陸し その対岸の安全な上陸地点を偵察して9月4日オングル島へ帰ってきた。ところが基地近くなって思いもかけぬことが生じた。雪上車がわざわざ迎えに来てくれたので 私たちは15頭の犬たちを放した。

基地から約8kmのその地点付近は もう何度も犬たち



(オングル島)



夜空に輝くオーロラ (57. 6. 3)

は通っている所なので ここからはどの犬も 迷わずに基地へ帰りつくと思っていたからである。

ところが これもまた 私の無知のなしたこと 一頭の犬「<sup>ひつぽ</sup>比布のクマ」はとうとう帰って来なかったのである。 なぞを秘めたこの失走は 白い氷の大陸へ永遠に消えうせたクマの姿がいまだに私の眼に浮ぶ。

### ボツンヌーテンへの旅

偵察行で ある程度の自信を得た私たちは いよいよ目的のボツンヌーテン行を実行しようと試みた。

まず最初に バッド島の先の方の上陸地点に物資（食糧と燃料）のデポーに行かねばならぬ。 このデポー隊が雪上車2台で出かけたのは9月27日であった。

6日間の旅行中には 最低 $-35^{\circ}\text{C}$ になったことがあったが それでも前の犬ぞり行のときよりは暖く 平均 $-25^{\circ}\text{C}$ 前後であったろう。 この旅行から帰って後 いよいよ本番のボツンヌーテン行を雪上車でやろうとしたが 運悪く熱風送風機（ハーマンネルソン社製・米軍使用のもの）が故障してしまった。 エンジンの始動や

修理にはなくてはならないもので これなくして雪上車による長期旅行は無理となったので これによるボツンヌーテン行はあきらめなければならなかった。

そこで犬ぞりが登場し再び起用されることになった。

「犬ぞりで ボツンヌーテンまで行って来い!!」西堀隊長はこう断を下したのである。

中野ドクターをリーダーに 例によって犬係の北村隊員と私との3人が 犬15頭で昭和基地を出発したのは10月16日であった。 これから27日間 私たちは私たちの越冬生活中 最も楽しい素晴らしい（この表現は私の全く個人的なものだが）旅行であった。

外国隊の大規模な旅行に比べれば 彼らのいうほんのちょっとした「リトルジャーニー」にすぎないが 私たちにとっては 今までのすべての人々の威大な努力の結晶であり 積み上げられたピラミッドの最上上の1つの石を乗せる仕事であり そして私たち自身の夢の実現である。 15頭の犬たちは今までの訓練が実を結び 予想以上によく働いてくれた。 私は毎日毎日 胸あたたまる思いで犬を追った。

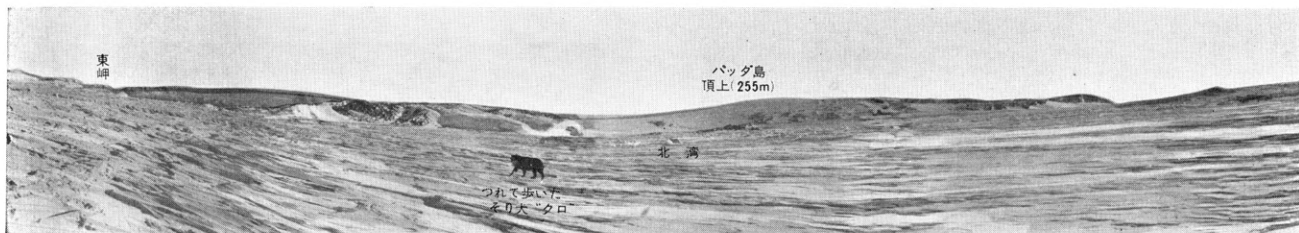
バッド島の手前にある円丘氷山群 これは老衰した大きい氷山の集合地である。 高さは50m前後だが いずれも直径1km余 丁度奈良の三笠山を幾つも並べたような型でつらなっている。 この円丘氷山群を迂回することは距離が長くなるばかりでなく 海氷上にクラックが多くて危険なのだ。 私たちはこの円丘氷山群を乗越えた。 荷は重く雪は深い。 だが犬たちはよくこれに耐えた。



海氷上を帆をかけて進む犬ぞり（遠くオングル島を望む）  
(57. 8. 16)



レンバ島にたどりついた犬ぞり (57. 8. 9)



パ ッ ダ 島 全 景

10月25日午後 3人はボツヌーテンの山麓に達した。高度約1,000m 気温は $-20^{\circ}\text{C}$ 前後だが相変わらず地吹雪がものすごい。翌26日朝も $-26^{\circ}\text{C}$  風速15mで相変わらず 風が強い。午後になるとおだやかになる傾向があるのでテントの中で待期する。

午後 <sup>から</sup>空荷の犬ぞりで ボツヌーテンを一周した。周囲4~5kmのこの小さい山塊ではあるが 四圍氷河でけずられて そう簡単には登れそうにない。

まず 山塊に仮りの名前をつけた。東峰・主峰・西峰 そしてその西側の小さいピークは 犬たちを記念して犬山という。

登攀できそうなルートとして

- ① 犬山と西峰の間のコル(峠) (これを犬山峠と仮称) から ボツヌーテンの西峰にそつて登る
- ② ボツヌーテン南面の主峰と西峰との間のルンゼ (せまい割れ目 アレートともいう)
- ③ 北面では東峰と主峰との間のルンゼ

この3つ以外にはなさそうである。

その日の夕刻4時40分 3人は犬たちをキャンプに残して頂上アタックに出発する。第1のルートだ 犬山峠まで 一歩一歩ステップを切つて堅い氷を登る。峠を少しすぎた所で 3人はアンザイレン(ロープで結び

あうこと)した。 いよいよこれから西稜にそつて登る。

トップは中野リーダー 次に北村隊員 しんがりである。岩登りが多いのでアイゼンをつけていない。氷の斜面にくと大きくステップを切る。先頭の老登山家 中野リーダーの振るピッケルの先から キラキラ光つた氷のかけらが私の頭上をかすめる。下を見降すとキャンプの犬たちが豆つぶのように小さく並んでいる。

18時20分 トップの長髪さん(中野リーダー)は1つの大きいオーバーハングの下についた。

「どうするだろう？」 後から登ってきた私は気になった。だがそれは高さが3mぐらいて両側は切り立った崖である。

「止めよう」中野リーダーが声をかけた。

翌10月27日 午前中はまた風が強い 午後2時10分 キャンプを出た私たちは 今日アイゼンをつけて 第2のルート即ち南面のルンゼに取りつた。今度は私にトップを命じた中野リーダーが しんがりである。

雪崩に注意しながら 一歩一歩登る。気温は $-20^{\circ}\text{C}$ 前後である。ピッケルを握る手がシットリとあせばむ

午後4時05分 3人は頂上(標高約1,500m)に立った。感激の瞬間である。かくして ボツヌーテン登頂に成功した一行は いろいろな調査をして 出発以来27日目に基地へ帰ってきた。



極寒時の犬ぞり旅行( $-35^{\circ}\text{C}$ 前後) 左 立見隊員 右 西堀越冬隊長 (57. 8. 30)



海水のクラックマハンモックドアイスの間をのりこえ犬ぞりは進む (57. 8. 31)



パッダ島旅行の際の第3キャンプ  
(円丘氷山上 気温 $-30^{\circ}\text{C}$ ) ('57. 8. 30)

### プリンスオラフ沿岸の旅行

私たちが ボツンヌーテンから帰った頃 立見隊員達は 長頭山方面の調査に出かけていた。その帰りを待たずしてこんどは 西堀隊長をリーダーに 再び北村隊員と私がプリンスオラフ沿岸に向って犬ぞりを走らせた。昭和基地から東北方 丁度ボツンヌーテンと反対の方向である。

この旅行は16日間(11月25日~12月10日)で今までの旅行に比べて 非常に暖かだった。海の氷はゆるみ出しクラック(割れ目)が各所に生じ バドルが発生しつつある。気温は最低 $-15^{\circ}\text{C}$  日中は $0^{\circ}\text{C}$  近くまで昇り日射はとても強く 海水上の雪は この輻射熱で溶けしかも夜に(夜といっても太陽はほとんど沈まない)なると再び結氷する。これはいわゆるザラメ雪を結成して犬の足の裏には非常に悪い。

去る1月 はじめて宗谷から出発した犬ぞり偵察隊のとき 犬の足の裏を痛めた時と同じ様に 今もまた犬は血のスタンプを押して 懸命にそりを引く 可憐というもあわれである。見るに見かねた西堀リーダーは 犬に靴をはかせることに一心だった。私たちの靴下が利用され 手袋が徴用された。犬たちはその都度いやがって口でぬいでしまう。だが西堀さんの根気の強さは 何度も何度も 繰り返し繰り返し犬に靴をはかせた。

とうとう 犬たちも靴をはいているほうが痛くないことがわかったのか 靴をぬがなくなった。

### 地質調査の結果について

犬ぞりの全走行距離1,600km 雪上車による調査走行距離1,500km 合計3,000km余であった。

地図上では 南はボツンヌーテン山(南緯 $70^{\circ}23'$  東経 $37^{\circ}55'$ ) 北は日の出岬(南緯 $68^{\circ}08'$  東経 $42^{\circ}37'$ )にわたる間の地質を調査することができたわけであるがいずれにしても この広大な地域を立見隊員と私との2人で調べようというのだから 概査も概査全くちょっと行って 岩石試料を取ってきたというにすぎない。

岩石の試料はリンゴ箱大の箱にして 13箱 約500kgの量のを飛行機で持ちかえたので 目下整理中である。全般の地質については 後日さらに詳しく報告する予定であるが 野外調査の結果を大ざっぱに申しあげると次のようである。

- ① 地域全体すべて 先カンブリア紀の各種片麻岩類 および花崗岩類からなっている
- ② これらの古い岩石の地史は 次の3つのグループに分けられる
  - i 野外名「褐色片麻岩類」の形成 塩基性岩層を伴う
  - ii 野外名「縞状片麻岩類」の形成 ざくろ石の形成を伴う
  - iii 野外名「花崗岩質片麻岩類」の形成 酸性のペグマタイトを伴う
- ③ 新生代氷河作用の影響を著しく受けている  
(鉱床部 菊池徹技官)

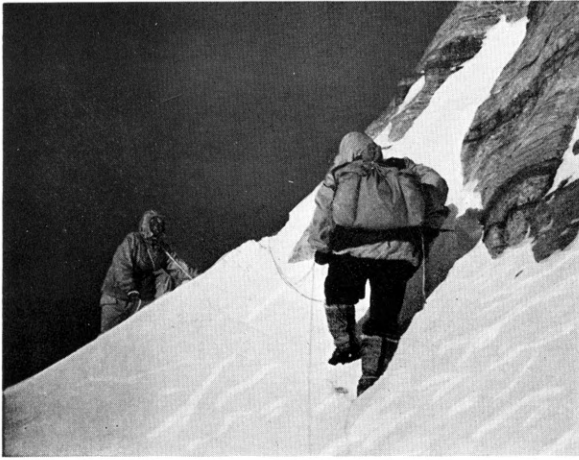


氷河の押し出しにおされてパッダ島にのし上った海水 ('57. 8. 31)

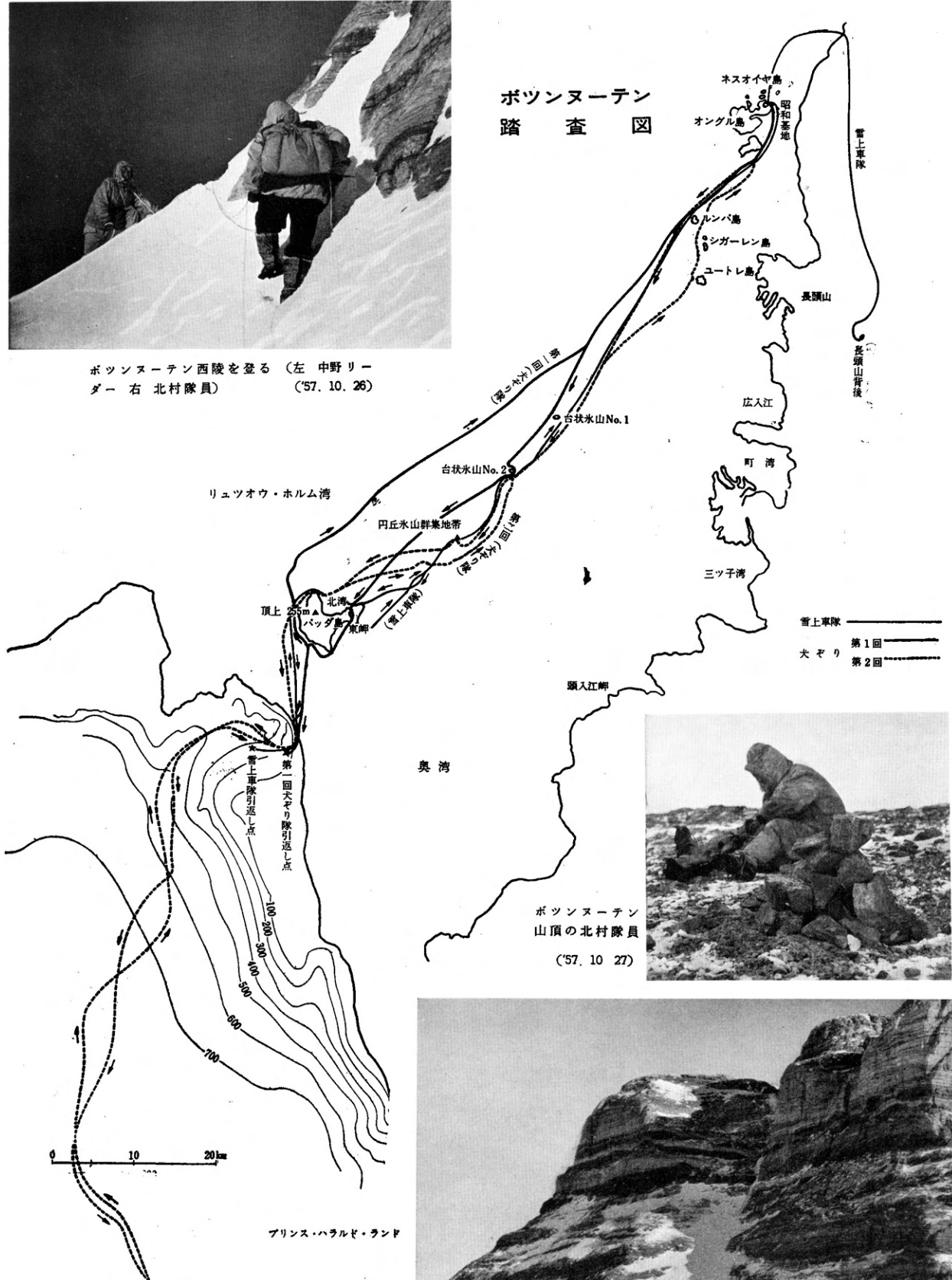


海水(厚さ1m~2m)上にこのような堅い雪が積り(30cm~50cm)凸凹の面(サストルギーという)を形成する ('57. 10. 2)

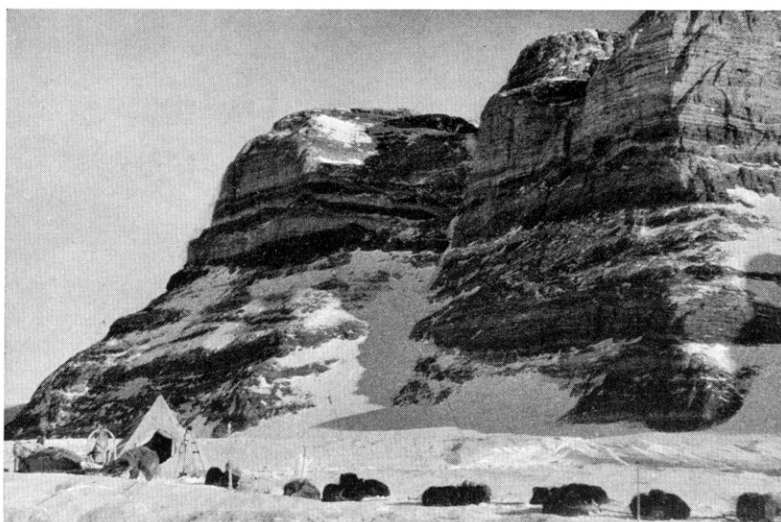




ボツンヌーテン西陵を登る (左 中野リーダー 右 北村隊員) ('57. 10. 26)



ボツンヌーテン山頂の北村隊員 ('57. 10. 27)



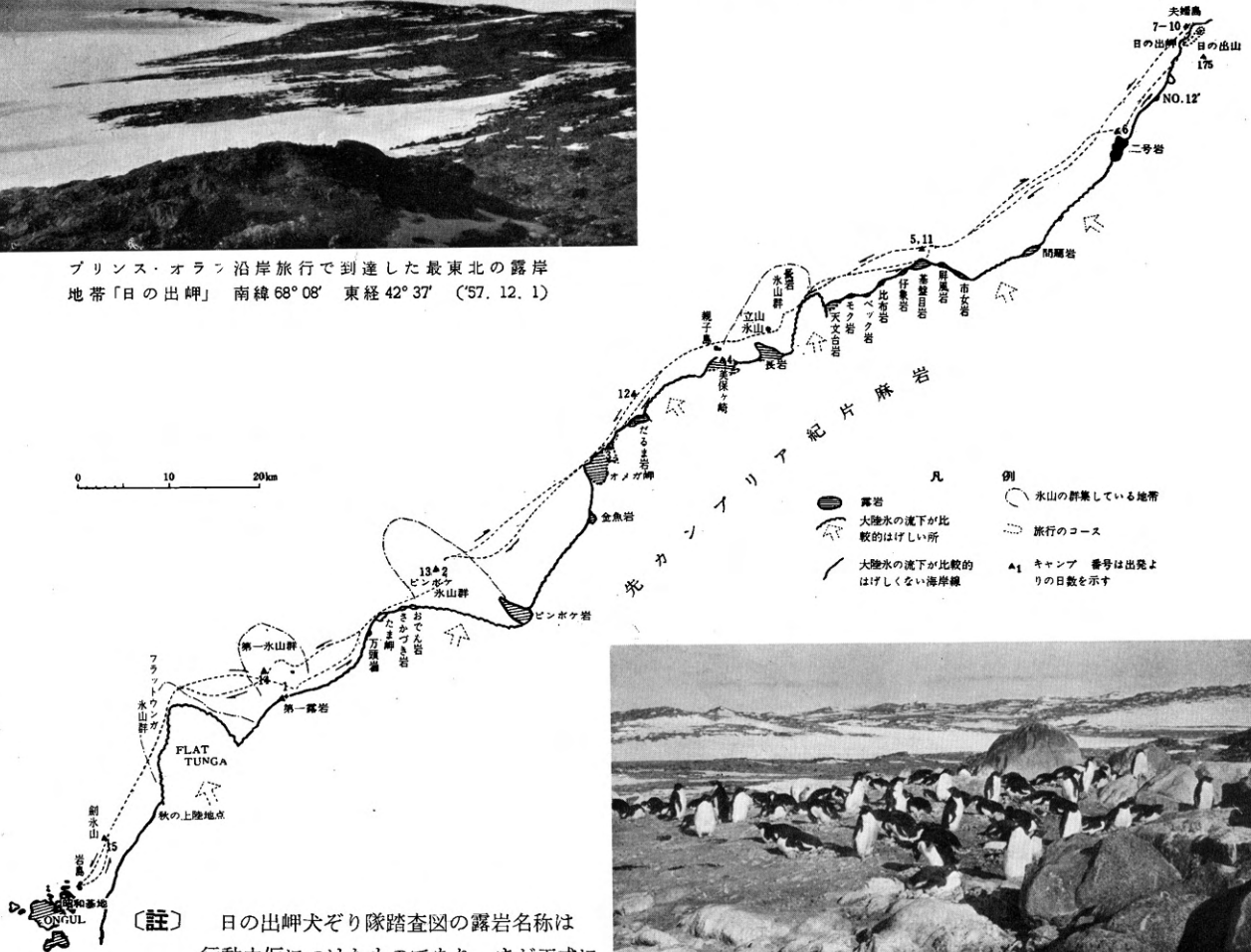
ボツンヌーテン山麓でキャンプを張る ('57. 10. 26)

ボツンヌーテン 1480m  
 32年10月 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, の7日間滞在する  
 登頂 昭和32年10月27日16時5分

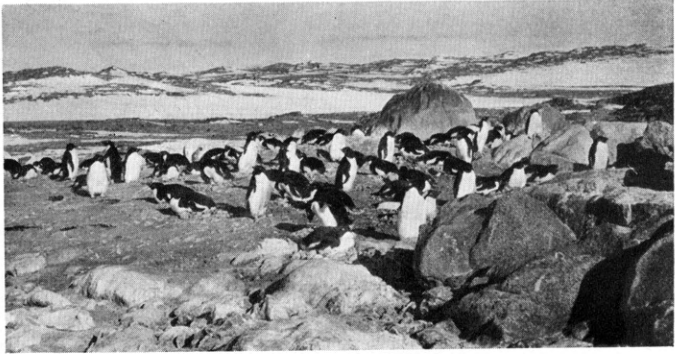


プリンス・オラン沿岸旅行で到達した最東北の露岩地帯「日の出岬」南緯68°08' 東経42°37' (57. 12. 1)

### 日の出岬犬ぞり隊踏査図



〔註〕 日の出岬犬ぞり隊踏査図の露岩名称は行動中仮につけたものであり まだ正式に認められてはいない。



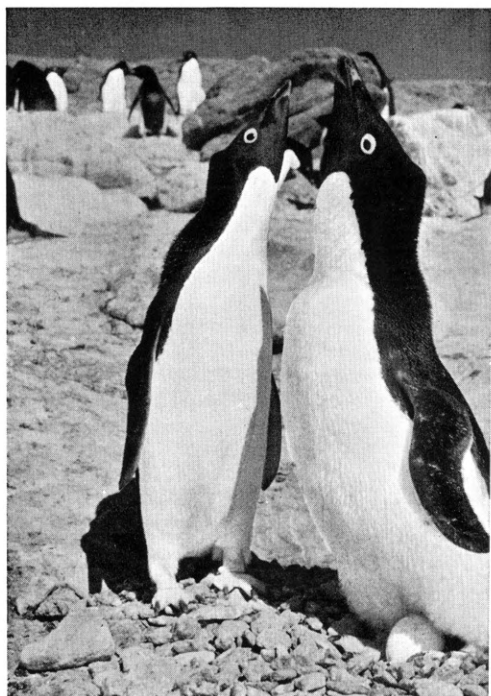
「日の出岬」で発見したペンギンルッカリー (57. 12. 2)



プリンス・オラフ沿岸の氷山のそばを通る犬ぞり (57. 12. 5)



現地で採取した卵 (57. 12. 20)



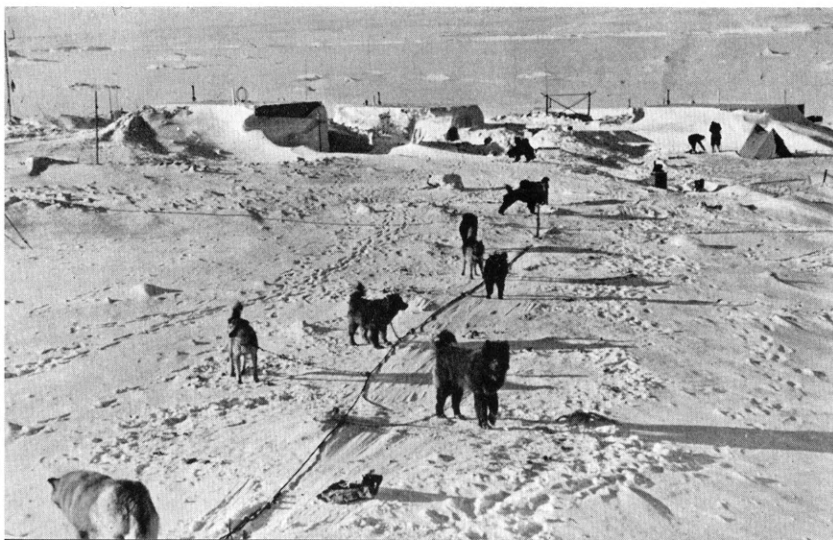
卵を生んで歓喜するアデリーペンギン夫婦  
(オングルカルペン島にて (58. 1. 13))



犬は毎月および大旅行の前後に秤量するが40 Kgもある犬は2人の隊員でつるし上げるのにも骨がおれる仕事である



オングル島西側にできた海水面でゴムボートを浮べて遊ぶ  
(58. 1. 31)



基地につながれている犬たちはるかに南極大陸を望む  
(57. 9. 11)